

## シベリア抑留紀行

愛媛県 井手 正人

満州の北端の街黒河は黒竜江を隔ててソ連領に接している。昭和二十(一九四五)年十月我々の部隊はソ連領に渡るためこの黒河から外輪船に乗った。船底が浅く外側に水車がついている奇妙な船で水車が回って進む。川幅は三百メートルくらいであろうか、すぐ近くに対岸のブラゴエシチェンスクが見える。黒竜江の水は美しく澄んでいたが、川底はその名のように薄く墨を流したように見えた。船は間もなくブラゴエシチェンスクに着いた。土堤のすぐそばにソ連軍の兵舎があり、人家は少なかった。私はロシア人の支配する国、ソ連の風物に未知の興味を持っていたが、建物は粗末であり、風景は索漠として、満州領の方がずっと活気があるように思った。駅までの距離は遠かった。戦術上の理由であろうか、約六キロメートルほ

途中に駅らしい場所もあったが、地名を示す標識は見当らない。やがて夜になった。入ソ第二日目、夜汽車の旅は皆の不安と期待を乗せてごとごといつまでも走り続けた。

騒がしい声で目が覚めた「だまされたぞ、西へ向っている」「やっぱり駄目か」そんな話が聞える。空が明るくなって、列車の後方が東であることが分かったのである。私は半ば覚悟していたことであり、別に驚きはしなかったが、これからのような処遇を受けるのか、どんな労働や生活をするのか不安であった。大部分の者が私と同じように考えているらしかった。

人間は不遇な運命や、未知の不安を予見するとき、とかく樂觀的に考えるものらしい。捕虜であるから厚遇される筈はないが、戦争は終わったのだからそれほど苛酷な待遇は受けまいであろう。敗戦の日本に帰っても苦しい生活が待っているだろうし、いずれどこにいても働かねばならないのだ、働きながら未知の国を無銭旅行できるではないか

どであった。我々はその夜駅の郊外に野営した。

兵隊たちの関心は専ら帰国のことであった。

最初奉天駅を出発する際、ソ連軍は、君達はポツダム宣言によって日本に帰国させるが大連経由は目下のところ帰国する日本人が多く、汽車は混雑し、船も足りない、それで君達はいったんソ連領に入りウラジオオを経由して帰すと説明していた。我々は半信半疑ではあったが、敗戦したのだからどうにも仕方がない。私はすぐ帰れるとは信じていなかった。おそらく半年か一年くらいは復興作業をやらされるのではないかと思ったが、皆一緒であり同じ運命にあるのだから大して不安は持たなかった。

次の日ブラゴエの駅から貨車に乗った。朝から空は雲っていて方角は分からなかったが、シベリア本線に出るまでは北上する筈である。

貨車の窓から眺めるこの沿線地域は、地味肥沃で土は黒々としていた。馬鈴薯を収穫した跡らしい畑が果てしなく続いており、人家は少なかつた。

と考えたりした。

列車は時々停車し、なかなか進まなかった。なぜか理由は分らないが、おそらく輸送が輻輳していたためであろう。二日くらい停止したまま動かなかつたりした。夜間に脱走者が何人か出たらしく警戒が厳重になった。十日くらい経過して列車は湖畔に出た。中央シベリアにある世界一の淡水湖バイカル湖である。

トンネルの多い湖のほとりを約一日間走り続けた。バイカル湖はその間見えかくれしていた。途中湖畔の観光地のようなところに停車し、車外に出て休憩した。十月下旬の水は冷たく、湖面を渡る風は寒かった。湖水は蒼黒く無気味な静けさを見せ、冬將軍が間近に迫る気配であった。

シベリアの大河がバイカルにそそぐ、その河口に到達した街、イルクーツクは美しい街であった。それまでに見たどの街も、殖民地的な安っぽさと貧困を思わせたが、この街は建物も、道路も、そして並木にもヨーロッパ風の落ちついたたざま

いを見せ清潔であった。シベリア鉄道は線路に所々四桁の数字を書いた標識があつた。最初は何か分からなかつたが、間もなくこれは鉄道の距離を示したものでモスクワを起点にキロ数を示したものであることが分かつた。だからこの標識によつてどのあたりを進んでいるのか、およその見當がついた。

巨木のひしめく大森林地帯や、原生林の中を何日間も走り続け平原地帯に出た。ノボシビルスク、オムスクを過ぎ、距離標識（モスクワからの）で二千キロメートルくらいのところ、ペトロパブロフスクに着く。ここから南下していよいよ目的地に到着したらしい。その日は食事の配給はなく、空腹をかかえて貨車に寝た。ブラゴエを出発してから、五十日に及ぶ大旅行である。しかし途中で止まっていることが多かつたので、普通に走ればおそらく十二、三日くらいの行程であらうと思つた。

翌日下車して見て驚いた。駅ではない。建物が四、五軒あるだけで他に何も無い。見渡す限りの

伍者は放置する以外にない。放置すれば何も無い平原であるから、その内に狼に食われてしまう運命にあつた。私の小隊でも落伍しようとする者を励まし尻を叩いて引張つたがついに倒れてしまつた者が何人かいた。これらは後から落伍したものは結局行方不明となり先に落伍した者で馬車の下に積まれた者は圧死してしまい、上に乗せられた者だけが目的地に生きて到着したのである。私は疲労で目の前がともすれば暗くなつたが、落伍は死に直結すると思ひ懸命に歩いた。日が暮れてから後、前方に明りが見えた。そのあたりはなだらかな起伏があつて、明りが歩く場所によつて見えかくれている。夜間の明りは近くに見えるという。それからが又遠かつた。疲労で意識がもうろうとした頃ようやく収容所に到着した。

#### スパスク収容所

到着したのは夜中の十二時頃だつたと思う。粗末な土造りの建物で室内は土間である。中が通路で両側の約一メートルの高さに、製材したままの

平原である。遠くの方はなだらかな起伏が見え、高原地帯であることを思わせた。午前十時頃出発した。平原の中を歩いて行くのである。十一月末といえども本格的な冬が近い。気温は零下一度くらいであつたらうか。ソ連監視兵の説明では、約五十キロメートルのところ収容所があるという。我々は信じられない気がしたが、やめるわけにはいかない。長い閉鎖的な貨車生活と栄養不良で、体力は弱り思考力も鈍つていふように思つた。考えるのが面倒くさいのである。又考えても選択の余地がないのでどうにも仕方がない事であつた。雑のうと毛布一枚を肩に掛けた軽装であるが、前日から飯を食つていないので、夕方になると空腹と疲労で落伍者がたくさん出た。

落伍者は隊列の後方に馬車を二台用意してあつてこれに積みこんだ。だんだん落伍者が多くなり、人間の上へ上へと積み上げていった。

荷物と同じである。ついにいっぱいになつてしまつてもう乗せることが出来ない。それ以後の落

板をはつてあり、これが寢床である。この収容所にはドイツ人の捕虜がいて、案内してくれたが、我々が到着することは何の連絡もなかつたので、食事の準備は出来ていなかった。ドイツ人は残っている食事を出してくれたが、個人に配給されたのはスプーンに二杯のカーシャ（おかゆ）であつた。焼石に水というたとえがあるが、二日間何も食わないで寒中行軍をして来た我々にとつて、ほとんど何の役にもたないであろう二さじのおかゆをむさぼるようになめた。そして崩れるように倒れ、そのまま眠つた。翌日から食事にはありつめたが量が少ない。粟やきびのカーシャ（塩と油で味をつけたおかゆ）が茶碗に一杯から一杯半くらい量のそれだけである。ここでは格別仕事はなかつたが、空腹でたまらなかつた。夜は食物の夢ばかり見ていた。

我々は何のためにここに来たのか、ここはどこであるか、何も知らされてはいなかつた。ロシア語の分る兵隊もいて、ソ連兵にきいたが、何も教

えてくれず、彼等も又詳しいことは知らない様子である。そのうち英語の達者な兵隊がいて、ドイツ人に話をきき大体の様子が分った。

ここは中央アジアにあつて、ソ連邦を構成する国の一つであるカザフ共和国である。地名はスペース、そしてここは一時的に收容されているだけで、労働收容所の受入体制が出来るまで待機しているのだという。

このドイツ人は、昭和十八年スターリングラードで敗れ捕虜になったとのことで、ドイツ人の外にルーマニア人、ハンガリー人がいた。スターリングラードは厳しい戦いであつたので、戦争中は苛酷な待遇を受けたらしく、二十時間労働もしたし、栄養失調や発疹チフスで倒れた者が多く、現在生き残っている者は約三割程度だという。

日本人は戦争が終つてから来たのだから、そんな事はないと、慰めてくれたが、これは大変な所へ来てしまつた、もう帰れないかも知れない、戦争は終つたのに、異郷で行方不明のまま、人生を

入手していたが、おいおいなくなつてしまつた。ソ連人やドイツ人は紙を使用しないらしい。日本人は幼児のときから使用しているので、括約筋の働きが悪いのか、どうしても付着しているようで気が悪い。とうとうやむを得ないので使用せずに立上つたが、気が悪くてたまらなかつた。それもおいおい馴れてしまつた。

二週間ばかり経過した頃、各小隊から選抜し、約六十人が、行先は分からないが出発することになった。軍隊時代から慣例のようなもので、何かよく分からない転属等は、勤務成績のよくない者や、受けの悪い者が先に出不されてた。小隊長をしていた少尉と私は、仲が悪かつたので、私も推せんされた。どうせどこかへ行くのだからと腹をきめていたから、嫌な少尉と別れた方がよいと思ひ、進んで参加した。後で考えるとこれが幸しいたのである。

六十人の先発隊は、深夜トラックに乗つて茫漠とした平原を進んで行つた。どこへ行くのか我々

終るのか等と思うと、やりきれない思いがした。

この收容所のペーチカは石炭をたいていたが、質の悪い赤茶色の小片ばかりで燃えにくかつた。燃えるという感じではなく、赤くなるだけでそのまま消えてしまう。たきつけの薪がなく、枯草を使用するので、石炭を燃した経験の乏しい私には至難事であつた。ペーチカ当番の夜、ついに火が消えてしまつたことがあつた。

しばらくして石炭掘り作業に行つた。赤茶色の石炭を不思議に思つていたが、これは掘るのではなく拾うのである。昔アフガニスタンから北上したイギリス人が、ここで錫の採鉱をやつていた当時、使用した石炭を捨てたもので、食用にしたらしいらくだの骨と一緒にたくさん捨ててあつた。その内燃えそうなものを拾うのである。

入ソ以来、生活用品は何一つくれないので最初に紙に困つた。大便の用済後に使用する紙である。汽車旅行中に一般の民間人と物々交換で、新聞紙やマホルカ（刻み煙草で新聞紙で巻いて吸う）を

には分からない。月光に輝く広野はまるで死の世界のように静まりかえつていた。

#### サマルカンド

翌朝サマルカンドへ到着した。到着してから分かつたことだが、我々六十人は本隊の受入準備をするため、トラックで先発したのである。新しい住居は、粗末な木造の建物で、以前は懲役囚の労働收容所だつたらしく、ところどころ破損している。早速壁や寝床を補修し、炊事場の整備をやつた。

次の日、徒歩で来た本隊が到着した。彼等は疲労困ぱいしており、うつろな目をして、建物に入るとすぐ倒れてしまう者が多かつた。

以前のときより寒さは厳しく、栄養不良は増悪していたから、無理もなかつた。防寒靴をはいている者はよかつたが、編上靴の者は例外なく凍傷していた。私は体力にはあまり自信はなかつたので、もし本隊にいたら、落伍していたかも知れないと、内心、幸運に思つた。本隊はカラカンドの

探鉱炭坑行と、このサマルカンド行に分かれたので、私の小隊も半数くらいしかいなかった。仲の良かった友人の多くがいらないのは淋しかったが、あの小隊長もいなかった。

各小隊は二十五人ずつに再編成され、本格的な作業が始まる。私の隊はカーバイド工場へ水道を布設する工事に回された。カチカチに凍った大地をつるはしで掘るのは苦しい仕事である。冬は地下二メートルまで凍るので二メートル三十センチ掘らねばならない。つるはしを打込むと小さな穴が出来る。一尺角くらいのまわりに、小さな穴をあけていき、次にその角の中へ打込むのだが、空腹で力が入らず、作業は容易にはかどらない。ソ連側では遅いといって怒鳴る。日本側では飯もろくに食わさないで仕事が出来ると、一斉に座りこんで抵抗する。ソ連兵が来て機銃を手に威嚇する。仕方なく立上る。仕事はのろのとやる。初めはそういうことの連続であった。しかし我々が抵抗しても、彼等は決して手をかけようとはしな

殺風景なところで、まさにシベリアの流刑地というにふさわしい土地であった。作業場では移住民と交流する機会があり、品物を交換したりしていた。

彼等はいろいろな民族がいたが、最も多かったのはシチエンンといって、黒海沿岸に住んでいたトルコ系の民族である。彼等はドイツ軍の占領時代に、ドイツ軍に協力したという理由で強制移住させられたという。彼等は貧困であったが、また陽気でもあった。自分たちの不遇な運命を悲しむ様子はなかったが、国家権力の前には甘受する以外に途はないから、悲しんでなんかおれなかったのである。若い娘達もいたが、朗らかで屈託がなかった。「ドラーヌスチャポンスキーサルダート」(今日は日本の兵隊さん)と快活な声でよく挨拶していた。

年が明けて、昭和二十一年一月下旬頃、懲役囚が入るため、収容所を明渡しして移動することになった。次の収容所は湖の北側にあり、以前は政治

だった。日本の軍隊は手がかかったが、これは国民性の相違であろう。

あるとき、同じ作業場で働いているドイツ人が言った。「日本人はなぜソ連側に協力して仕事をしないのか。ここはソ連であって、日本ではない。働かなければ食料も多くはもらえないし、要求も通らない」。

我々の側でもそれは考えていた。しよせんは、はかない抵抗に過ぎない。このままでは犠牲者がふえる一方である。事実、作業の行き帰りや、作業場で疲労で倒れる者が毎日何人かあったのである。

そして作業の能率を上げることに努め、ノルマは順次向上し、食料の増配や、処遇の改善の要求もおいおい実現していった。

このサマルカンドは建設途上の工業都市で、住民は捕虜と懲役囚と強制移住民、それに少数の管理者、監視兵とで構成されていた。草原のなかに工場と収容所と移住民の粗末な住居があるだけの

犯が収容されていた所で、裏側に岩山があり前面が湖である。ここには高射砲二十四連隊の兵隊が、先に入居していた。

又、小隊を再編成したので、軍隊時代からの知人は、小隊にはいなくなり、同じ建物の中にも教えるほどになつてしまった。

しばらくしてから、鉄材運搬作業を割当てられた。戦利品の機械類や工場資材等が運ばれて来て、野積みしてあった。有名なドイツのシーメンスやクルップの名のある機械類がたくさんあった。これらを運搬し、工場に据えつける仕事である。運搬機械等はなかったが、こういう仕事は日本人の得意とするところで、梃子とコロとロープを利用して運搬する。我々は作業の要領がよく、能率が上がり、ノルマは五〇〇%から七〇〇%くらいに評価してくれた。収容所の食糧はノルマによって配給されており、食事もノルマによって差をつけることをソ連側が要求していたが、日本側ではこれを拒否して平等に分配していたのであるが、ど

うしても差をつけることを要求するので、この頃からノルマによって各小隊の食事が違うようになった。私の小隊は、連日高成績をあげていたので、多量にもらった。依然として粟やきびのカーシャだけで、時たま黒パンがあったが、満腹していた。食事に差をつけたのは三カ月ほどで、後では日本側の強い要求で平等に分配するようになった。

#### 異郷に病む

サマルカンドの冬は長く、そして厳しかったが、その内に作業に習熟し、人間的な思考や精神的な余裕が出来るようになった。昭和二十一年四月のある日、突然発熱し胸痛を覚えた。寒気がして苦しかったが、作業はそのまま続けた。風邪だろうから一晩ぐっすり眠れば回復するだろうと考えていた。翌日起床して、かつて経験したことのない激しい胸部の疼痛に襲われ、歩くことも出来ず、そのまま座りこんでしまった。親友の渡部兵長が医務室に連れて行ってくれ、直ちに収容所の病院

に入院した。軍医が背中に試験穿刺して抽出したものは、血と膿がまじったようなどす黒い液体であった。

軍医は私に言った。「悪性の肋膜炎だ、かわいそうだがここには薬もないし、食事も悪い、どうにもしてやる事が出来ない、じっと安静にして、体力の回復を待ただけだ、話をするのもよくない」私はこの軍医の言葉と表情から、危険な状態であることを悟った。三八度から三九度の発熱が続き、全身の脱力感と、胸部の激痛で会話する気力さえ失い、食事は全く喉を通らなかつた。話もせず、ベッドに寝たきりでいたが、二、三日経過して胸痛が和らぎ少しずつ食事が出来るようになった。

この病院を担当しているソ連軍の女の軍医中尉がいて、時々見回りに来ていた。彼女は診察はせず、すべて日本の軍医にまかせ、医学の知識を教えてもらっていたようである。ある日私のところへきて、顔を近づけ、病状をきき、それから手振

りを交え、平易な言葉で熱心に語りかけて来た。

分からない言葉もあったが、大意は理解出来た。

「ソ連へ来て悪い病気にかかり気の毒に思う、お前はまだ若いから日本にお母さんがいるだろう。お前がソ連で死んだら、お母さんは悲しみ、そしてソ連を恨むだろう、私はソ連をそんなに思われたくない、身体に気をつけて無事日本に帰れるよう祈っている。」そんな意味であったと思う。

このあまり美人ではない二十七、八歳の女医の体臭には辟易したが、彼女の言葉には真情がこもっていた。

この病院には四十人くらい収容されていたが、重症が多いので死亡者が多かった。朝、便所へ行く時、廊下に死体が置いてあるのを、時々見かけた。

ある夜、私は便所へ行くため、壁づたいに衛生兵の控室の前を通ったら、中から話し声が聞えて来た。「二号室の井手も助からないだろうな」K衛生兵長の声である。私は脳に衝撃を覚え、足がふ

るえているのが分かった。

ベッドに入ると、いろいろな思いが浮んでは消えた。一万数千キロかなたの故国はあまりにも遠く、故郷の思い出は、まるで前世の出来事のように、次第に遠のいていくように感じられた。異郷の雪の下に冷たく埋められることはたまらない思いで、何としても生きて帰るため、最善の努力をする事を、その夜、心に誓った。深夜の病室は静まりかえり、私は始めて真の意味の孤独を知った。

私は軍医の言葉を忠実に守り、話をせず、安静に努め、食事はゆっくりとそしやくして食べた。一週間くらい経過して、快方に向っていることが自分でもよくわかり、それから順次回復していった。

隣のベッドに、肺結核で入院して来たN上等兵がいた。入院した夜、激しくせき込み、井に二杯の血を吐いた。泡のまじっている鮮明な血液である。どこからこんな血が出るんだろうと不審がっていたが、私は気の毒で説明出来なかつた。咳が

出るから悪いので、咳さえ止ればすぐ治ると本当に信じこんでいたが、衰弱するのが自分でよく分かったらしく病気のことを話さないようになった。そして時々、日本の方角を向いて座り、何事かじつと考えていた。私には彼の気持がよく分かった。四、五日して、また激しく喀血し、その夜あつけなく死んだ。この山口県出身の良家の出らしい端正な容貌をもった二十二歳の男は死ぬまで自分の病名を知らなかった。

病室の窓からも春の息吹が感じられるようになり、やがて一斉に青草が芽を吹いた。その頃、私の病状は順調に経過しており、胸部痛はいくらも残っていたが、平熱であり体力はかなり回復していた。

間もなく軍医は私に退院を告げ、そして本当はもっと置いてやりたいのだが、ここではそれが出来ない。身体に十分気をつける、又悪くなったら帰って来い、と言った。

私は、生命の恩人であり、又温厚な人柄と弱者

みにする作業である。この牛は広い所に放牧されているので、図体は大きい極めておとなしい。手頃なやつ角をつかんで捕え、牛車につけ、それに乗って走らせ、七キロから十キロも離れた場所まで草刈や集草をする。草を運ぶのは、切倒した樹木を、そのままの方を牛の首かせにつけて、樹の上に乾草を積んで牛を走らせる。まことに素朴で原始的な方法であった。住民はこの運搬に使う樹木をマシーナ（英語のマシンに相当する）と呼んでいたが、思わず微笑をさそう呼名であった。ここでは樹木が少ないため、燃料は牛の糞を乾燥したものを用い、たきつけに乾草を使用する。牛糞は青い炎を出してチヨロチヨロと燃えるばかりで、火力は弱く、炊事は長時間を要した。生活用品は不足し、食事は粗末であったが、この生活はのどかであり、自由で、サマルカンドへ再び帰りたいとは思わなかった。

ソ連ではたたくさんの民族が雑居しているためか、人種的偏見が極めて少ないようである。この住

に対するいたわりの気持を持っているこの軍医を尊敬していた。病氣再発の不安はあったが、又退院の喜びと、新しい夏の生活への期待もあったので、喜んで感謝の言葉を述べ、病院を後にした。

コルホーズ

退院すると、ちようど新しく病弱者のみで小隊を編成することになり、私も編入された。そしてコルホーズ（集団農場）へ派遣されることになった。

見渡す限りの大草原の中に、小さな集落があった。住民は、シチェーン、カザック、ロシア人等がいて、牛を飼っているコルホーズである。

北国の春は短かい。青草がのび、おしろい花が咲いて、草原はもう夏であった。

ここでは監視兵はおらず、自由に振舞うことが出来た。この広い草原が作業場では、監視も出来ないし、トラックか飛行機でもなければ脱走は不可能であろう。

我々の仕事は、刈取って乾いた草を集めて野積

民も我々を差別なく遇してくれた。彼等は休日には、よく歌い、踊っていた。昭和十六年関特演の頃歌われ、終戦後また流行した歌で、イエスリザフトラワイナー（明日若し戦いならば）というのがある。私はこの勇壮な中にも哀調をこめたメロディが好きであったが、この住民がこの歌をよく歌っていたのが印象深い。

牧畜コルホーズの平和な生活は、長くは続かなかった。また胸部が痛くなり、二、三日して発熱した。以前のように痛みが激しく歩行が出来ない。ちようどサマルカンドへ乾草を積んで行く馬車があったので、便乗させてもらい、収容所へ帰って再度入院した。

二度目の発病は緩慢に悪化した。回復は早かった。四、五日して平熱となり、十日くらいして退院した。

今度は別のソフホーズ（国营農場）へ派遣された。住居がないから、家を作って入るといっているので、資材や食糧をトラックに積んでいった。ここは馬

鈴薯を栽培しているソフホーズで、シチエンとユダヤ系のドイツ人、それに少数の朝鮮人がいて、それぞれ集団生活をしていた。

川のほとりの適当な土地を選定し、建築にとりかかる。家となる場所に、長方形の深さ一メートル余の穴を掘る、そして隅に丸太を半分に挽き割った木を立て、その上に梁をわたす。壁には草の生えた土を四角に掘取ったものを積重ねる。屋根は灌木をとって来て梁の上にならべ、その上に草の生えた土をおく。入口は用意してきた木製の戸を取りつけた。外壁の仕上げをしてそれで終りである。半分は地下にもぐった家であるが、雨が少ないから、これで十分耐えられるし、冬は暖かい。午前十時頃到着して、建築に取りかかったが、その日の夕方には、もう完成していた。翌日から、馬鈴薯畑の除草と草刈に従事した。ペトロパブロスク工業大学の女子学生が夏季労働に来ていた。この地域の住民は一般に無智で、簡単な計算も出来ない者が多く、外国のことをほとんど知らな

った。

宿舎である土小屋のそばを流れる川では、手製の釣針で魚が面白いように釣れた。鮒とはやを合せて二で割ったような魚で、うまくはなかったが、汁に入れて食った。又、しめじに似た茸があり、誰かが試食して、確かめてから食ったが、これはうまくいった。野菜はなかったが、あかざや、十字科の植物の若芽をとって汁に入れた。

ここの生活も、貧弱ではあるが、自由であり、楽しみもあって、捕虜であることを忘れる思いがあった。

しかしその自由な生活はわずか一カ月で破れた。病弱者数人が収容所に呼び返され、私もその中に入ったのである。

帰ると野菜貯蔵庫の仕事がまっていた。収容所内にある地下貯蔵庫に、運ばれて来たキャベツと馬鈴薯を選別して貯蔵する。次は、コンクリートの水槽に、青いトマトを塩漬にする。これらの仕事が終わってからは、炊事係、建物の修理、雑役等

ったが、この学生たちは、さすがに違っていた。日本や中国の大都市の名を知っており、日本の工業や、鉱山のこと等を質問して来た。日常生活に使うロシア語は大体理解出来たが、こういう話になると、単語をあまり知らない私には、詳しい説明は出来なかった。

資材や食料の運搬に使うため、馬と旧日本軍の輜重車を貸与してくれた。小隊のほとんどの者が高射砲出身で、私とM上等兵が、輓馬砲兵だったので、二人が馬車係になり、運搬や、馬の世話をした（実際には輓馬の経験はほとんどなかったのだが）。

この仕事は融通がきき、住民と接触する機会が多くてよかった。仕事がいやになると、馬の世話をすると行って、馬と一緒に水浴したり、煙草や新聞紙を買いに行ったりした。

朝露に濡れた草原を乗馬で疾駆するのは爽快であった。なだらかな丘に上ると、あかざや、おしろい花が群生し、見渡す草原は、果てしなく広か

収容所内の仕事に従事していた。この頃の事は、不思議にあまり記憶にない。多分印象に残るような事が少なかったためであろう。

#### ダム建設工事

厳しく陰うつな冬が、再び訪れた。ソ連の収容所では、二カ月に一度くらい身体検査が行われ、尻の肉をつまんで、その張りの具合で三段階に分け、一、二級が重労働に従事し、三級は軽労働をしていた。私は退院後ずっと三級であったが、昭和二十一年十二月頃二級に昇格し、一般の作業小隊に編入された。その頃、ダムの建設工事が行われていたが、来春の雪解けまでに完成させるため、交替制の突貫作業で進められていた。私の小隊は、夜間作業を割当てられ、午後八時から明方まで働くことになった。

工事現場は、凍結を防止するため仮の囲いをして、中で石炭を焚いていた。コンクリートを打込む場所は、幾つもの区画に別れ、上に板で橋を架けたようにしてある。ミキサから出てくる生コ

ンを一輪車に載せて、その板の上を歩いて運び、生コンを投込む。板の通路はゆら揺ら揺れたり生コンの重みでしなる。ともすれば身体の平均を失いそうになる。体力を要すると共に要領がいる。

電灯は暗くて見え難い。もし落ちたら人間コンクリートになってしまう。体力の弱つていた私にとつて、この仕事は苦しく、いつも死の恐怖にとりつかれているようで、実にいやな仕事であった。何とかして他の仕事に変わりたい、又は死なない程度に病気が再発して入院したいと考えていた。

ストーブの石炭焚きを懲役囚のロシア人がやっていたが、あれがよいと思ひ、監督に石炭焚きをやらせてくれと頼んだ。なぜかというので、私は目が悪いので電灯が暗くて見え難いと答えた。彼は少し考えてから、大きくうなづいた。二、三日して石炭焚きを割当てられたが、この仕事もやってみると楽ではなかった。広い工事現場を回つて、次々と石炭を入れる。温度は摂氏五度から八度に保持しなければならぬ。石炭を補給しなければ

重くてよく動くから、疲労度が激しい。病後の身体であったから、いざれ又発病すると心待ちにしていた。今度は死ぬかも知れないと思つたが、もうどうでもよいという気持だつた。

しばらくして昼間作業に変わり幾らかよくなった。作業が苦しいので、時々順番が回つてくる便所掃除を志願したこともあつた。便所は大きな長方形の穴を掘り、上に板を何枚か架けたもので、その板にまたがって排便する。囲いはしているが屋根はない、中で皆一緒に排便する。冬は凍つて順次せり上つてくるから、それをつるはしやバールを用いて崩すのだが、大小便の凍つた粉が、服や防寒帽に付着する。落したつもりでも残つていて、宿舎へ帰るとそれが解けて、臭いのに閉口した。

収容所長はタタール人の少佐で、見るからに獐猛な顔をしており、感情の動きを表情に表さない男であつた。彼のやり方は、我々には冷酷に思へたが、それは軍人として任務に忠実であつたに他

ならない。休む間もなく動かねばならなかつた。おまけに質の悪い泥炭で、燃え難く、ともすれば火が消えそうになつた。三日目頃何か所かであつたに火が消えてしまい、温度が摂氏五度以下に下つてしまつた。私はストーブ係は不適格ということになり、戸外作業へ回された。

トラックで運ばれて来た砂をおろし、ミキサに連結している穴にほうり込む仕事である。

寒い日は零下四〇度にもなる厳冬の夜間作業は、又違つた苦しみがあつた。この工事は至上命令だつたらしく、どんなに寒くとも、吹雪の夜も、休ませてはくれなかつた。人間コンクリートになるおそれは無かつたが、凍傷を警戒しなければならぬ。自衛の手段として靴下は腹巻のネルを用いて手製の袋を作り、底は六重とし上は四重として靴下にし、その上に防寒靴を履いた。顔は防寒帽の前に布をつけ、目だけ出して作業をした。少し動かずにいると大腿部や腕が麻痺してきて固くなつてくるからいつも動かねばならない。被服が

ならないと思う。

彼にも人間的な一面があつた。あるとき、私は朝の集合に少しおくれて行く途中、この所長に会つた。仕事はどうかと言つたので、苦しいと答えた。

彼はこちらへ来いと言つて、私の小隊から若い者を二人選び、私と合せて三人に、自分の家の雪かきをしてくれと言つた。所長の家は小さい木造の家だつた。妻と五歳くらいの子供がいたが、彼は子供を見ると抱き上げて、可愛くてたまらないようにこやかな表情で頬ずりをした。あの冷たく獐猛な顔つきの男の、信じられないような一面であつた。妻は金髪のロシア人であつた。太つた中年女で、美人という言葉にはおおよそ縁のないような女だつたが、雪かきがすむと我々を室内に招き入れ、牛乳を飲ませてくれた。そして私に年令は幾つかとときく。西洋人には東洋人の顔は若く見えるらしいことを私は知つていたので、十七歳だと答えた。彼女は「私にも同じくらしいの息子がいる。お前はまだ子供なのに兵隊にとられて可哀想に、

日本にお母さんが帰りを待っているでしょう。無事に帰国しなさいよ」と言った。

この所長夫妻に接して、久しく忘れていた暖かい家庭と、人間的な臭いに接する思いがした。

寒さがいくらか和らぎ、暖かい日には防寒帽のたれを上げられるようになる四月頃、私はまた発病し三回目の入院をした。このときは以前ほどの痛さは感じなかったが、それだけに病状悪化の不安があった。

軍医は私の病状について、ソ連側に対し、熱はなくともかなり長期間の療養を要することを強硬に主張してくれた。

ちょうどその頃、サマルカンドにX線の透視器が設備されたので、私は透視を受けに行った。結果は、右胸部が変形し、しよ液に押されて心臓が脇から背中まで移動しているという。検診書を書かれたがその他の詳細は言葉が分らず理解出来なかった。

控室でまっついているとき、二十二、三歳の金髪の

美人が隣に座っていた。話しかけたくなつて、まず時間を聞いた。すると彼女は病氣のことや収容所の生活等、いろいろ質問してきた、そして自分のことも話した。

間もなく彼女の夫である赤軍の中尉が出て来た。彼の言葉は早口でよく分らなかつたが、別れるとき何か困っているかというので、煙草がのみたいというのと、彼は、自分は煙草は吸わないがこれで煙草を買えと十ルーブルの紙幣をくれた。物乞いをしたような気がして返そうかと思つたが、彼も好意でくれたものだろうし、又煙草も吸いたかつたので、喜んでもらつておいた。

この人達のように、個人的に接すると、ソ連人はわりと好人物が多かつたと思う。

再びスパスクへ

入退院を繰返し、三度目の病院生活であつたが、帰国のあてもなく、絶望感と焦燥のうちに、昭和二十二年の春は訪れようとしていた。

ロシア語にザフトラ(明日)という言葉がある。

入ソした始めの頃、我々はいつ帰国出来るのかと交渉したら、ザフトラと答えた。明日とはあまりに唐突であるが、ソ連へ来て以来、夜中でも、いつでも、だしぬけに移動させられた経験を度々もつていたので、或は本当かも知れないと、大騒ぎしたことがある。そしてソ連人はその場限りの、

出まかせを言う奴等だと、日本人は憤慨した。後で知つたことだが、ザフトラは明日という意味だが、同時に、いつか、その内に、という意味もあるのだ。ソ連人は物の考え方が大雑把で、こういうところが日本人の感覚と違う。彼等にとっては、明日も、その内にも、ともに未確定の未来であつて同じことだ。

ある日病院へソ連の軍医が来て、スパスク収容所が療養所になっており、結核性と長期性の患者をスパスクへ移動させるといふ。私もその中に入つていた。いつ行くのかと聞いたら、ザフトラと答えた。ザフトラではいつの事やら分らない、いささか失望して、ベッドへ入つて寝てしまった。

ところが翌日、本当にトラックが来て、出発することになった。みぞれ降る日、外套を頭からかぶつて、トラックの荷台に乗つた。

さらば、血涙のにじむ辺境の地、サマルカンドよ、プロンストロイの灯よ。

知友の眠るラゲルの丘は、霧に煙っていたが、あれは哀惜にうるむ眼のせいだったのだろうか。

スパスクは少しも變つてはいなかつたが、最初の仮寝の夢を結んだこの思い出は、わずか一年半前のことなのに、遠い昔のような気がしてならなかつた。なだらかな丘にかこまれた、この高原の療養所に、雪はまだ残っていたが、日当りのよい所は解けて地肌を見せ春はもうそこまで来ていた。

収容所の病院に長い間入院したが、薬は第一回目の入院のとき、満州からもつて来た造血剤を二三回もらつたことがあるだけで、その他には、薬も注射も一切受けたことはない。

この療養所でも同じである。ここでは食餌療法

と称して一日五、六回の食事が与えられた。第一回 粟のおかゆ、第二回 塩鮭一切れ、第三回 小麦のスープ、第四回 トマトの漬物、第五回 黒パン一切といった調子で、一日の食事を回数を多くするだけなので、少量ずつでも空腹だった。

肋膜炎はかなり長期を要する病気であるから、以前のように入退院を繰返していたら、結局生命を失うことになると思っていたが、ここで長期療養を認められることになり助かった、これで当分生き延びられると幸運に思った。

療養であるから、何もすることはなく、寝て起きて食べてさえおればよかった。身体は特に悪いとは思わなかったが、血沈検査の結果はあまりよくないようであった。

周桑郡出身の男がいた。望郷の歌を教えてください。

いつも眺める 窓辺の雪よ

柵に小鳥が鳴いている

雲はとぶとぶ 汽車の音淋し

なかったのかと悲しげな表情で語った。

スパスクの丘にも夏が来た。残雪があとかたもなく姿を消して、高原は緑のじゅうたんを敷きつめたように美しく輝いて見せた。

その頃、どこからともなく、帰国が始まっているという情報が入った。作業成績の優秀なものから帰しているという。それでは我々はいつ帰れるか分らない。優秀な実績を残さねばならないのなら、病弱者の帰国はほとんど絶望的になってしまふ。ここで私は疑惑を感じた。冷酷なソビエト政府が、人道的な措置を取ることが期待出来ないが、打算的に考えても、厄介者の病弱者を先に送還することが得策であることは、自明の理ではないか。政策として、帰国という餌で釣り、能率を上げさせることは考えられるが、いずれにしても近い内に病弱者の帰国が始まるのではないかと思つた。

病気が回復すれば、収容所へ帰されるから、悪化しない程度の現状維持を望んでいたが、期待に反して私の病状は順調に回復しつつあった。そし

はるか故国よ ふるさとよ

彼はこうした淋しい曲が好きだったらしく、啄木の歌をよく歌つた。

病みて悲しや あゝ月の夜は

夢も通えよ 故郷の空

旅に死するとも あゝ運命なり

歌ははなさじ 我が生命ゆえ

低い声で歌うこの童顔の軍曹の横顔を、今も臉に浮べることができる。彼は退院して、カラカンダの炭鉱へ帰って行つたが、無事帰国できたのだろうか。

病室は時々変わったのでいろいろな人に接した。ベルリン市出身の二十六歳の工兵伍長ハインツは、彼の少年時代に演じられた祭典、ベルリンオリンピックでの日本水泳チームの活躍などを熱っぽく語ってくれた。彼は両親と許婚者の写真を肌身離さず持つていて、何度も私に見せた。彼は祖母がイギリス人であり、ドイツ人とイギリス人は人種的にも極めて近いのに、なぜ戦争をしなければなら

て退院の準備として、同室者の食事の世話をしていた。

間もなく重症者を除いて五十人ほどがカラカンダへ移動することになり、名前が発表されたが、患者兼世話係として私の名も入っていた。

ダモイ（帰国）

何のためにカラカンダへ行くのか分からなかった。重症者と医療関係者が除外されているから、新しい病院が出来たとは考え難い。どこかへつれて行って殺すのじゃないかと誰かが言つたが、あるいはそうかも知れない。

しかし最も可能性が大きいと思われたのは、軽労働に従事させられることであり、もう一つは帰国である。

帰国は裏切られた場合の失望の大きさを考えると、悪い場合を予想しておくことが賢明だと考え、そのように自分に言い聞かせたが、やはり心のどこかで帰国を切望する気持が強かった。そしてそれが予感のように思えてきた。

カラカンドはボタ山の多い灰色の街だった。サマルカンドと同じように、樹木がなく、無味乾燥の辺境という感じである。こんな街に何の興味もなく、トラックの中で茫然と二年間の抑留生活を考えていた。トラックは鉄道線路の近くに停車した。日本語が聞える。

「オーイ、どこから来たか。喜べ、日本へ帰れるぞ」

皆総立ちになった。予感的中した。宙を歩むような気持で貨車に乗った。

聞けばカラカンド地区最初の帰還列車であるという。それにしても幸運であった。病気の回復がもう少し早かったら収容所へ帰されるところだった。

列車は来たときと同じ経路を通り十日余りでナホトカに着いた。そして海岸の砂浜で、船を待つ間テント生活である。

それまでの在ソ中、共産主義の教育を受けたことはなく、時たま配布される日本語新聞に、共産

主義の歴史や理論が掲載されていた程度であったが、このナホトカの野営生活では、宣伝、教育が盛んに行われていた。この四日間の生活は、赤旗やインターナショナルの歌を教えられ、演説をきくのが日課であった。

日本船に乗るまでは、いつどんな事で呼び返されるかも分からない不安があり、常に言動に注意していた。

四日目に、船尾の日の丸を掲げた恵山丸が入港して来た。

日本海の二日間の船旅は、おだやかで快適だった。船員は、敗戦の日本の様子についての我々のうるさい質問に、面倒がらず親切に答えてくれた。船の中で旧友のM君に会った。私と同年兵で、小柄な頭の良い男であったが、サマルカンドの鉄材運搬のとき、てこの棒がはずれ、顎をはね上げて、舌をかみ切ったが、死ななかった。その後、トラックの下敷になったが、また助かったという運の強い男である。だが顔は変形し、足を引きず

り、杖をついてようやく歩行する彼の姿に、かつてのあの澁刺とした若者の面影はどこにも無かった。

また、子供が三人いるという年輩の召集兵Tさんにも再会した。神経痛が痛いといって、いくらかはれた足を見せ、いつも足を引きずっていたTさんだが、今は直立して歩いている。きけばもう治ったという。日本船に乗ったから治ったのかと聞いたら、ニヤリと笑って、その通りだと小声で答えた。なるほど、そういう生き方もあったのかと妙に感心した。そして私は、彼の妻子のために、心から祝福をおくった。

昭和二十二年七月二十二日、恵山丸は舞鶴に入港した。

間違いなく本当に日本へ帰ったのだと、舞鶴の土を踏みしめたとき、あの焼つくような日本の夏が、全身を襲って来た。

生年月日 大正十四年三月十七日  
家族構成 妻、長男夫婦、孫三人の七人  
学歴 愛媛県立松山農業学校  
職歴 満州電業株式会社  
軍歴 昭和二十年五月入隊  
抑留地 カザフスタン、サマルカンド  
入所 昭和二十年十一月頃  
帰国月日 昭和二十二年七月二十二日  
帰国後の職歴 昭和二十五年十一月 県職員  
昭和五十四年三月 停年退職  
最近の状況 無職ですが元気で毎日を楽しく老後を送っております。

(愛媛県 山本 繁夫)